

日 本の、そして地域の魅力をお伝えし、それぞれの地域がこれまで以上に元気になるために、私たちにできることは何だろうか。少しでも貢献することで、皆さまにご恩返しをすることができないだろうか。JALグループの地域活性化に向けた取り組みには、そんな思いが根差しています。今回は、地域の皆さまの足として、日々運航しているJALグループ3社（北海道エアシステム、日本エアコミューター、琉球エアコミューター）をご紹介します。

北海道エアシステム お客さまとの距離が近いことが自慢！

札幌市から釧路市までの移動にかかる時間は、鉄道で約5時間。そんな大きな北海道の都市間を運航しているのが、北海道エアシステムです。札幌・珠空港と釧路空港を、わずか45分で結んでいます。

使用する飛行機は、スウェーデンの企業SAB社が製造した36名乗りのターボプロップ機（プロペラ機）です。本社のある北海道札幌市の札幌・珠空港を拠点に3機の飛行機で函館・釧路・三沢を結ぶとともに、離島路線である丘珠―利尻島線や函館―奥尻島線を運航。5路線24便を102名のスタッフが支えています。ご利用になるお客さまはビジネスや観光ばかりではなく、離島から札幌や函館へ通院するというお客さまも多く、地元の皆さまの生活

の一部になっています。また、リピーターの方が多いことも特徴で、空港旅客スタッフや客室乗務員はお名前や顔はもちろん好みの座席まで覚えていきます。「いつてきますよ」や「ただいま」また来週」という言葉をお客さまからかけていただくことも多く、いつも温かい気持ちをいただいています。

**厳冬でも安定した運航と
快適な空間を
お届けできるように**

札幌・珠空港は、日本でも有数の降雪の多い空港です。札幌・珠空港をはじめ、北海道エアシステムの就航する各空港では、お客さまは搭乗口から飛



行機まで歩いて移動します。そこで、お客さまの安全を確保するために、早朝からスタッフ総出で動線の雪かきをします。また、搭乗中のドアから冷気が入らないように、入り口にカーテンを付けるなど雪国ならではの工夫もしています。

3機の飛行機をすべて稼働して結ぶ

路線は、少しでも不具合が発生すると運航が途切れてしまいます。そのため、整備士はほんのわずかな不具合のサインも見逃しません。オペレーションスタッフは、天候の情報収集や、各空港との緊密な情報交換を行いながら、運航乗務員をサポートしています。

**丘珠空港や航空業界を
身近に感じてほしい**

北海道エアシステムは、以前は新千歳空港に拠点を置いていましたが、2011年に本拠地を札幌・丘珠空港に移転。その後は地域の皆さまとのつ

ながりをこれまで以上に大切にしてきました。例えば、札幌・珠空港や航空業界をもっと身近に感じていただきたい、という思いから学校の職場訪問を受け入れたり、空港で開催される航空教室の講師を社員が引き受けたりしています。2014年度は小中学校と高校を合わせて9校受け入れ、3回開

催された航空教室には100名を超える方に受講していただきました。後日届いたお手紙のなかには、「ただ仕事をするのはなく自分から進んで、情熱をもって仕事をしている姿が印象的でした」というコメントも寄せられ、スタッフ一同取り組みへのやりがいを感じています。

奄美群島から西日本の地方路線へ 日本エアコミューター

1983年、奄美群島間を結ぶ4路線の運航からスタートした日本エアコミューター。現在は鹿児島空港を拠点に種子島や屋久島・奄美群島などの離島を結ぶだけでなく、大阪・福岡などから山陰・四国など、西日本の生活・離島路線を結ぶ航空会社として27路線141便を運航し、年間約162万人のお客さまに利用していただいています。北海道エアシステム同様、SAB社製の飛行機と、カナダ・ボンバルディア社製高速ターボプロップ機（DHCR8-400）の2種21機と社員527名が運航を支えています。飛行機内では、喜界島出身の川畑さおりさんが歌う「永遠の碧」

や、与論島出身の寿里さんが歌う「私 はうたう」など奄美群島の豊かで優しいイメージを感じていただけるような曲をBGMに採用してきました。現在は鹿児島県鹿屋市出身の宮園唯さんが歌う「未来」を流しています。この「未来」という曲は、鹿児島県の離島とそれを結ぶ日本エアコミューターの飛行機をイメージして鹿児島出身の作詞家・作曲家の方が制作してくださいました。

地元を愛するがゆえに

「地元を愛される」航空会社を目指

CSR Pickup

～“地元”への愛を込めて～

JALグループの翼が 結ぶ地域と地域

し、地元特産品を生かしたサービスを実施しています。例えば、3年前より、初夏を迎える時期に生産者の皆さまのご協力のもと、鹿児島県産の新茶を期間限定で機内で提供（飲物サービス実施路線のみ）し、ご利用のお客さまにその良さを味わっていただいています。

また、2013年からは、客室乗務員の有志が集まり、特産品を機内で販売するサービスを始めました。

きっかけは、短い飛行時間のなかでもお客さまとお話ができるように、客室乗務員が共有していた「就航地のオススメ情報」です。情報を集めることから始まり、製造業者の皆さまと調整を重ね、機内販売実施へ。こうしたプロセスを手探りで進めていきました。何度も製造現場に足を運び、お話を



客室乗務員が地域の魅力をお伝えしています。



特別なボックスに入った機内限定お菓子セットを製作。ハンドクリームは、もともと大きいサイズだったものを機内販売用にパックに入れても場所を取らないよう携帯に便利な小さいサイズにしました。

をさせていただくなかで、商品の特徴や作り手の皆さまの思いを実感として持つことができ、客室乗務員自身が楽しんでみながら、自信をもってお客さまにおすすめするまでに至りました。これまで、鹿児島県産「夏煎茶」、奄美大島産「黒糖シヨコラ」、種子島産「安納いもグラッセ」、阿久根市産「旅する丸干し」、そして南大隅町（佐多町）産レモンガラスや鹿児島市（桜島）産の桜島こみかん、ツバキ油などの成分を配合した「ハンドクリーム」などを販売し、お客さまにご好評をいただいています。こうした機内販売は、地元

特産品への愛情ゆえに、既製品の販売にとどまらず機内販売限定のボックスに入ったお得なセットの製作、そして現在では機内販売の方法や購入されるお客さまの立場に立った特別な商品サイズの開発と、進化して取り組んでいるところですが、今後ご搭乗された際にはぜひ、機内販売品をお手にとつてご覧ください。

沖縄・那覇と島々を結ぶ

琉球エアークommunity

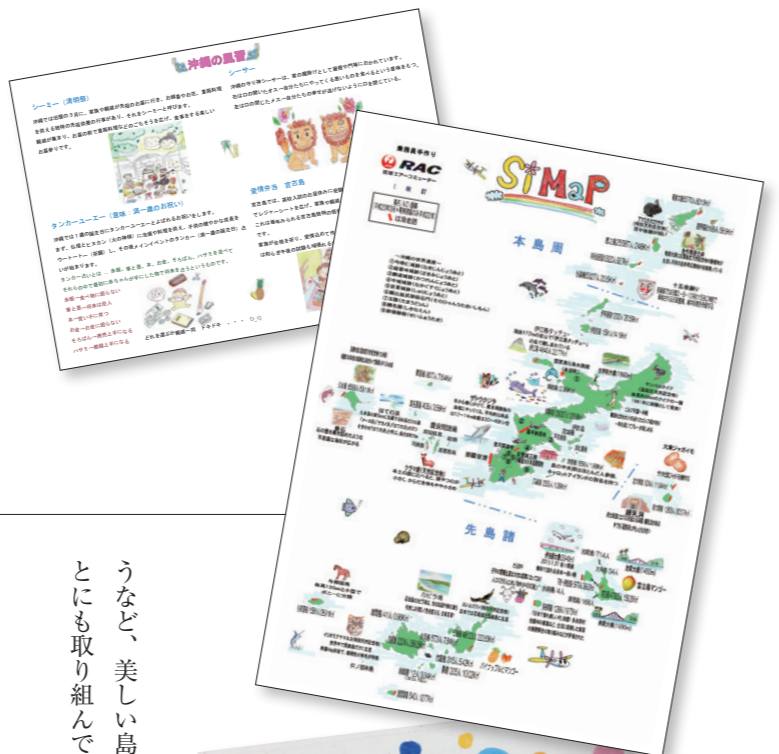
美ら島のおもてなし

今年で創立30年を迎える琉球エアークommunityは、那覇空港と沖縄県の各離島や奄美群島を結んでいます。カナダ・ボンバルディア社製高速ターボプロップ機のDHCR81300（50席）とDHCR81100（39席）の2種5機の運航を、114名の社員が支えています。北は奄美大島、東は南北大東島、南西方向には先島諸島・与那国島まで12路線41便を年間約40万名様のお客さまに利用していただき、地域の皆さまの足としての役割を担っています。

地元への愛は、前出の2社にも負けません。

例えば、客室乗務員手作りの地図「SIMAP」は、沖縄本島を中心に離島も含めた周辺地図に人口や名所・特産品などを記入し、紹介しています。裏面では、琉球文化を受け継いだ沖縄ならではの風習についても掲載しています。イラストはすべて客室乗務員が担当し、観光のお客さまだけでなく、島んちゅ（地元）の方が見ても楽しめる内容として大変好評です。

12月のクリスマスシーズンには、沖縄を代表する伝統的な染色技法の一つである紅型（びんがた）を取り入れた機内の飾り付



客室乗務員手作りのクリスマス紅型リース

うなど、美しい島の姿を残すことにも取り組んでいます。

出会いと別れの春

3月は進学・就職・転勤など、多くの方が新たな節目を迎える季節でもあります。特に琉球エアークommunityが就航する島々には高校が少なく、沖縄本島に進学するケースがほとんどです。この季節、多くの方が子どもたちの見送りやお世話になった先生方の見送りに空港までいらっしやいます。

送迎デッキにはたくさんの方が詰めかけ、飛行機に乗り込む友人や先生方に名前を呼びかけたり、「ちばりよー」「さようなら」と声援や別れを惜しん



だりする声が響きわたります。送る人も送られる人も泣きながら手を振っている光景は、何度見ても胸が熱くなります。

機内で涙を流しながら外に手を振っているお客さまを見て、もらい泣きしそうになるのをこらえながら搭乗アナウンスや安全についてのデモンストラーションを行う客室乗務員もいます。琉球エアークommunityのスタッフが、改めて地域の皆さまの足として、つながりを感じる瞬間の一つです。

私

「私」たちJALグループの夢は、「世界で一番お客さまに選ばれ、愛されるエアライングループ」になることです。各グループ会社が、地元の皆さまに愛していただけるように。私たちの愛する地元、そして各地域がこれまで以上に元気になるように。そんな思いを込めて、今後も全社一丸となつて取り組んでまいります。



けを行っています。一昨年も客室乗務員が地元の紅型工房を訪れ、全機分のクリスマス紅型リースを製作し、クリスマス期間中に操縦席ドアに飾ってお客さまをお迎えしました。特に女性のお客さまが関心を持たれていた様子で、琉球文化をより身近に感じていただけるきっかけとなりました。

文化の発信だけでなく、地元根ざした活動にも力を入れています。例えば、就航している離島の地元小学校での航空教室の開催や島探検のレクリエーション活動。久米島や与論島では海岸を中心にスタッフでゴミ拾いを行